

色芬心句辭冬考秋



延宝中の吟

なほの登ふし小敷と秋の柳を

柳陰敷白中の人に人あるとき

あつち柳あつちあつち詩をく

あつち細くあつちあつち

よる通いつつあつちあつちあつちあつち

淮南子曰一葉落して天下秋華嚴疏曰

如觀一葉落知天下秋見

素衣宿ひさびさあつちあつちあつち

猿はあつちあつちあつちあつち

棧中あつちあつちあつちあつちあつち

大聖寺は城外全昌寺といふ

寺にともする程か賀の地なり

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

葵とて、田の伸或も用ひ、塘に中田の
溝より沃地なるといへり、その他は六月
迄、世に花咲て、葵のこゝろ、さす、
らり、に先り、あり、倭名集に水葱、
可食、和名又延喜式万葉集にも見ゆ、
そのよし、尾由千梅、ついで、
その、西の、西八、
七八月、
此、
白秋

白秋

あしとたうを秋

あしとたうを秋
秋冷くも毎にむけ瓜 茄子

是は、
一本、
其は、

又 月や六日も

愚考古今集俳諧
川系をりや
又、
又、

たゞのこころもさういふは六の夜の夜
いおさめれ

古湘水吟あり
あつとさういふもはかき心浪河

小陸のよ行柳して舞後
必書定て侍とりふ下にとさる
彼依依の吟も海の角十八
陰波を返る車あ三十八
よこあうかたり早の陰難
苦の隈くさるさけの平
舟にとほらるやあきやうふえ
つゝさめらふは吟ふはうの女

白秋 又

くかてあをきくせれ愛ゆ
たれそかまらさきめくた
吟して侍りて大衆朝歌の
たれいを流しきく
ゆり、たれおそあき名を
さういふあも本をたきさる
においひ意揮ひきて悟付
に旅愁をいつて心とする程
目眩に海に沈了月夜のく
らゝ流あさるよかま星
まゝりゆはたると洋のさ
り波を言さなくさこにて

たかきぬま夏もふり大水よりて白の面大
丈夫さより後体も号位の夏をまじりぬま
あり福と信とのまねをさしりて芭
蕉流を揮ふ一己に款を突探せむ
たえね斗勝ふゆらきやうかか
の本探とい夏かきりり字の音通
やききたよりてさる水と出れ書りあり
用ふ趣かり

まふ堂々毎七十ある万七
とせの秋あつとます
万葉にち待てども
寸是につたあまの七人

白秋十

あつと七夏の秋いよす

七探ふ秋乃もいと早の秋
慮者万葉七行ハ山上隠良の交へたさう
尾ら首首えれけよめしを茶茶茶の
必又尚進令ハ唐會昌五年三月二十日
白樂天くまうまう後道坊よ今人の不謂
まふ七夏の胡果吉飯 酢松 劉真 盧
真 張 輝 真天ヤ人公ナニ百さし
七十以上く又た朝さうハ貞觀十九年三月
十日大納言年名ハ小野山を今人見と
さしえたりき後安和二年三月十三日

大細く有衡ハ粟田ハ山庄ハ舎一或ハ金川
ハ庄ヨリ大細ク宗忠ハ又前大宮大進清
輔ハ良ノ室ニ社者流ハ今守カトナク
ありし一寺ナリ又後高ハ信ノ見ゆる七度
と古又志ケルハ其ノ跡ナリ

骸骨の画

愚考生者必滅の事ハいふ事ニ其ノ凡ク
其ノ人ハ死シテ其ノ身ハ金水ニ入ルル
此ノ其ノ後ハ其ノ身ハ其ノ身ニ入ルル
其ノ人ハ其ノ身ハ其ノ身ニ入ルル
其ノ人ハ其ノ身ハ其ノ身ニ入ルル

蓮ハ地カキテ其ノ中ニ魂ハ
其ノ中ニ魂ハ其ノ中ニ魂ハ

胡蝶云白氏長き又葉ハ請看原下村村人
死不厭一村四十家哭葬無虚月又後明詩
變ハ遠人村依ハ墟里煙ソクハ其ノ中ニ魂ハ

愚考拾玉集ハ是結和成ハいつしハたえぬ
リハ其ノ中ニ魂ハ其ノ中ニ魂ハ
かたハ又世は其ノ中ニ魂ハ其ノ中ニ魂ハ
てあハ其ノ中ニ魂ハ其ノ中ニ魂ハ

愚考禮記注曰備と備耗さるゝ息ハ生息
すゝり安否を尋ふの義も宜令る事よき
是と奉公酌み十一さしを兄弟は白髪を
厚く杖ハみすより安大なりぬるものさ
つふくさる杖は脚けくはてさる事あり
あつてさる杖はさる杖はさる杖はさる杖
事始に舊事記云 饒速日神を祀る事
とす天羽矢あつて神衣帯も貫のさお
をさる白庭邑は藝をさるて墓とす
是をさるめり又墓をさるるるるる
ものさる杖はさる杖はさる杖はさる杖
くはさる杖はさる杖はさる杖はさる杖

白杖ナレ

さる杖の杖はさる杖はさる杖はさる杖

干茶葉を羅一 葉のうらさふ墓系

丸圍て籠手の老をさる
用ありをさる又今も杖乃
此杖とさるものかりめ
足おろかりてはさるてさる
すゝり今も杖はさる杖はさる杖

お書てさる杖はさる杖はさる杖

古今抄に曰く賀正の山杖は山中の足返り
橋の茶店にてさる杖はさる杖はさる杖

新ての浪

波のちや小貝よ更なる秋のそを

一書又新の浪ハ物々ありやすし小貝
ハ赤貝ハ白貝 山椒貝たしつふ秋のあき
小貝よてくまうつせ貝之西上人ハ故とを
ますくの小貝ひらふとくいろの浪しとを
りふ物あし心とよめしはあきり

小ナしくさく浪すすくの小貝ハ石

潮洲ヨムミツの山のうまひさくさくすく
小貝ハ西初は浪化公 匠さすく園雨の
吟うさくく古き衣の西上人の海を

一秋 十七

よて秋せしきりをの美文 浪のるよ

あすくしあかりぬらう浪とふらよめる
を新の浪とあきし何て秋思入る
新より浪伊勢もあきよ「さく」の浦の又の
浪とくさくぬもたそのかひとこのかきむを
すくむとま

あき細るらにさくのあきさく等秋は草を
秋くさくさくはあきさく信くけく
あきくさくさくさく秋のふら

あきくさくさくさくさくさく
あきくさくさくさくさくさく
あきくさくさくさくさくさく

てあつたのあつたにけふの笑つたり
けもの笑つたの存すきむくくけを
けつりつとま
一書る云々
字の西施の睨みと見か
とつる

思考支考といひ梅丸といひ
解けぬといひ
安年中は一雨は
といひ
て下
了も何そ句よ

白林 七二

小細のみに笑より
あつた
二俳賦の
邪証
中を
秋梅棠
始よ
蕃よ
らけ
了り
匈奴
日
日
日

答

香雨のやを美々客のてきり

花女の聲

枝ふりのこよくかきき美々客
愚考芙蓉はけ紅ををきり後紅ををきり
といふもさか雨は芙蓉さきありさきり
ておのり一次の白ハ田枝活法は曰一曉一番新
云々花女の情こりりかききとりふた
あきここのさき

嵐雪の四國よわきき
旗馬二百十口もま度

二りナリハおふりふりあきき
さききいふさききあきき

白秋二十一

よきをいふさき

を思て雷罵るるむのあき
こは程とおしはあきき
きくてもあききあきき

元禄三年の秋木暮の田中
よありて教戸の人くよ對寸

よありて教戸の人くよ對寸

愚考元禄ハ和夏始ニ云宋史云昭徳惠綏黎元
樹建皇極天祿無疆云々執之文章博士菅
原長量考之十年ハ孝徳天皇御宇始て大化
と云り清和天皇御宇始て經書より執て貞
觀より号以易繫辭云天地之道貞觀也

大凡のありたるも奈し一節あり
 かゝるさぬそ名ありサアけしるなり
 愚考番振も和事始に太閤朝鮮と伐せら
 少し始て後を言ふありしや信て言ふ濂六せう
 としふ不国不くよよりて千飛さるありと
 云く本朝もて形ハ異さるるものう節ありしハ
 いつりしものやしきまや
 當麻寺へ訪て屋上の松を
 見ると此千年も経きしむ
 大いさ年をかくんもいふへ
 り心かれ報情といへとも佛
 縁より引きて芥子斤の罪を

白秋 二十九

アゝゝゝ小きうゝたきんゝゝゝ
 ぞゝゝゝ

傍 墓 葬 しく死かゝり信 松
 愚考當麻寺ハ用明天皇才四皇子麻呂子の
 墓刻されし道師と惠灌律師とを葬しりし
 船の傍より始禪林寺 故當麻寺と云ふ天
 台宗よして寺外三百石中ね飛の古事とて
 見よかゝるゝ名を略し是時貞享甲子年と
 千一十年余とて千一十年と大敷をいふあり
 又いふ年をかくんは莊子云 昔有大木人偃之樗
 曲輪操其大敷年近石曰散方うく句のさる松樹
 千年所是朽樗也一日自為榮又法備也

新さけ吾人しきさうり心えほりり志しぬとすま
早、第のそく用研和の白をたぐり見たり

因実説

リみと君子はふくむあしして佛も又戒
此をいひたかくといふはさけうに持か
きき情のあやふく又義たすかしく
も多かろうア一人志しぬらう山乃
梅は下ふしに思ひおふ乃白ひよ志み
、思の思は人ぬの實もさる人さくを
いひたさるもあやさるもこの仕出でぬあ
まのこの世の就よ純志かれて志を棄
身を去ふためしもお回われと老の

身のり末を念有り茶浴舟に繩を借
えてもけり情をぬへさるもまは庭よ
まして罪ゆきぬへく人々七十を掃
くして身のきかるとり、終り
二十余年一始のむのまゝるる一社の
着のぬ一五十年三十年の歳に順
くしてあやましくつをいひ
や身あかちふ教記したる持えは
分別何れををあむさるるあま
るもけいひりるま一終り
して一三歳すくく者ハ是思の勝り
いひく是を世のいひまのいひあ

貪欲の魔界と心を怒り、溝に墮ちて
 おもひて安んずるも、南を
 仙の唯和言を破り、老のふと
 けり、人たれをせむは、
 出た、代の小業をさす、
 漁父、戸を閉て、
 又、安んずるを、
 して、三十年の、
 ちり
 暮れ、ひる、
 門乃、
 白秋二十九

門を鑽さむや杜甫字子美襄陽人玄宗朝
 奏賦二篇帝奇之授為參謀檢校工部郎
 大曆中遊嶽祠大水遇至大醉一夕卒
 年五十九唐才子傳曰杜甫字子美
 京兆人審言生閑閑生甫少貧不自振
 客越齊趙間李邕奇其技先往見之
 舉進士不中第困長安天宝三載玄宗
 廢獻太清宮饗廳及郊甫奏賦三篇
 諱之使詩詔集賢院令宰相試文
 章擢河西尉不殊改右衛率府昌
 曹參軍一教上賦頌多自稱道且言
 先君恕預以承儒守官十一世迄

審言以文章召於后賴緒業自七歲屬
辭且四十年然衣不蓋體常寄食於
人竊恐轉死濟聲下略考かへ
彼後去來の辭のうちよ門役けりりと
しとる考よ聞せりまき友かきを友と
するまありす和又かきを留りしと
測り清く度や多し後を記て王弘ら
嘉治のけ一帽十年冠りても自若たり
人より酒を送れを帽子脱て酒漏とする
の類、其行状一として杜み笑りゆひあり
以て芭蕉文集よ碎る人もありめて
測りたる実情よ立ゆりて百年此書を破す

毒海長老我ま戸より

可きことゆるを葬りて

何とくしや流き果たるすまかな

毒海長老記る未老

後醍醐帝の以てを後す

御廟年を以て其を何故志のふま

愚考後醍醐帝ハ人王九十五代後宇多天皇弟二の
皇子ハ西風指しつゝせむひ統千載集より
統後指し集ハ成謙余ニハ時のまひりて流り
むと寸天皇治ハ山ヨリ幸垂相師賢を
才代として台山よ少して元を身系ハ六波羅
勢を及心帝楠正成を召て軍を任

く多ういひ句のよに放て秘直口傳とふ直ハ
 ままてさるりそれの字に浪浪の意ある句
 ハ一通りれ其に心を結出とあり
 愚評必秘直口傳とて事ハましてまき直之
 と一概の論うてかつてを法よさるるなり
 秘直又口傳よしせよいふなりとむつらしき句で
 解してあつたれ時ハ論を秘直口傳と
 といて初心をわづつす云々なり句の
 上よみて解せぬ句をなきるなりなり及まぬ
 もはいいのふと骨をあたるとる骨なり
 法をまはりま直古詩古交を句よたると
 て句の法をあらはれ是秘直口傳なり

一むよくくむ手なりし出すハ非なりなり引
 以七部大波よくとる

画賛

ヲ本権裸童か出か那
 云云方極なり何れの心をあそりなり
 ちて江戸之國より色をばぬ権童の等
 して信の心をあつたるなりなり
 愚考ふとん裸童とんかぶらとん木
 権とんぬのぬのなち一つはりても一白ハ
 かき一木権のやけを多り決りたる供
 の年をももけりたなりもまはるる千
 日千お考りなり句の解しとんいふるある

分たむるに成るに損取にかはるの自負を情
不流に争志を是とむりて、山馬帽の
のまらちのうら長居のぬの有をほつて、
揮まらぬわらひ、
茶茶古今著同は長君と富山と角力の夏
あつちさんとも族さとの角力の句との子
見え見えするうれ今らの仇詰と着破す
うらまへ
東宮坊此句と景はも花見のたふし七き糸
の句を即興辨るうらまへといふ、
さてなより如うの偏りも及たれ七き糸のま
法とまらひかり居の一字の態態とあはす

秋三十一

俳諧の流と句作さるる
思考の及るに、
上さす、
の及る居申とり、
何れ御用とり、
殿内裏殿と申、
梅と、
美理弁、
さるる、
及る角力の名、

當麻蹶速より角力に始されしをきき
て教父を饒けきく。汝をよしく味すき
あり。柞角力に起り。和と又始と云。神代より
建御雷神建御名方神の競のりあり。以上
曰古又記。人白王に至りて。無仁帝七年七月大和
國當麻蹶速と云ふあり。又出雲國野見岩祢
と云。當麻とあり。此ま人を召て力をくくへしむ
岩祢。力まさりて。臨。建。脇骨をおる。腰を踏
て。出雲に。此より日。た。入。是。人代角力の
と。め。あり。云。是。木。を。出。し。て。志。を。出
す。と。賴朝公。云。せ。あり。所。池。と。云。又。ま。た
又。よ。せ。し。り。と。云。た。を。ゆ。た。は。汝。を。き。は。い

一白の正論をきき。柞角力に始されしをきき
任夷大將軍。任寸身。武家八千の始。す。り。を。れ
能。り。れ。眼。近。た。る。後。又。及。之。む。り。い。き。け。角
力。ぬ。り。し。今。を。平。の。代。より。て。い。角。力
場。の。言。様。ま。又。同。心。の。ま。る。固。を。て。角。力
さ。し。た。ま。を。出。さ。り。ハ。む。ら。か。た。は。汝。候。方
の。出。拘。より。て。任。今。ハ。汝。たり。と。夢。力。す。人
ハ。角。力。を。し。と。い。ぬ。と。り。と。夢。力。す。人
於。て。後。又。及。入。用。介。の。人。よ。て。ハ。候。せ。及。も
蹶。速。及。る。も。う。こ。ま。一。台。成。就。せ。は。是。は。の
誤。あ。る。を。及。と。り。字。々。あ。り。た。ま。を。き
誤。ま。の。ち。と。や。り。ま。り。あ。り。も。り。用。り

漁人翁をけり出り心か松島と初意おさし
まゝうてせむく後よふあしはを町をぬ白と急
るへし

古伝

おの守とる一といふをせがが

画賛

藤をくわすもくもさき意はぬへし
一書し語のたふいふことさくしよなもは
さうしもさき花さくしりてやそしものうて
はしりくやうれさすきしはさくしりてかの
やさしきかたのたふさくしりてさき
みりさうり帳さすくしりてさき意は

高秋三十七

愚者、世の通丁とて少集はる一晶とて
あし移風の状のまゝ一風しき白とつて
ゆゑ中とていふあしりゆゑを海をこの寺ま
てのうとあしをたててるの白をぬきて
余人の白にて入集したるうもさき

伊勢お玉のある茶店に休む
トに我を思ひたりはさしや
川へ流してさか女の料紙もち
出さるゝふふふふふふふふふ
さかりしのかたは主の妻と
なりけりさしあしりも
つてしりてを書しはさし

新刊の京周此平にわたり
 ろふをきいて句を忍びひ
 半りりも例おろしきままと
 いひせしめてまきらるん
 けりかたかたかくてかの
 浪のきくう白は若のそふ
 れおつてきくみわのま
 とりうをきくきく
 蝶とくひりる女はあふ
 崇ふ多布てふの翅とてま
 愚考円枝活法曰都下名奴楚蓮香と云国色
 を双也毎出則蜂蝶相隨慕其香也又白氏文集

為君薰衣裳君聞棠蔭不馨香香云索隱云
 蕙中綠葉紫莖魏武帝又此燒香云示雅翼
 二白一幹一花而香有余者蘭一幹數花而香不足
 者蕙心是也と云て似るもあはれしかる
 例一服のうち不いあはれは自らか
 句似よハおよふたふて武帝ハ蕙中を
 て香い燒又楚蓮香好々美人いを蝶のふ
 又君がめんに衣裳は重すたはる此一句の
 句い蝶とて女の衣裳はさしのすこと
 さしをいふまは化をいふも例を云
 正風くらむかてをめぐるとも例をま

書あり省る表徳林雪と中よす水といつ
きよつてもよせあり一本よとよ心定よとよ文を
を出れハ非ざるへ

静寂存云古今集「秋の路をあるふのすく」に
すきつけをふのうらさくさけるふかの侍
さりま

愚考心その後九六百二十後葉の移す九百
余に穀九四十余後と云

是す古調さり角カ云の詞は勝方まで及
この肩、方あり又く小といふをまきり

百秋四十

至ちり及くぬとくをあらふさすにちふりお
して同うもは思するふ

妹さうなるよ

乙も不そく角カ云そのもの

一書ハ不の委れ見り中におけるを踏し
て

八節書

八節書云乃格をまの

是も古調さり又云九世の渡とも格を
日本三景とく不渭松高峯時云格を又

三景を和分浦千賀隆電切渡文殊と云
切渡ハ公天格をさり丹後と謝那之格をハ

心をそくくとらひしれぬ養親ありねふへ
そくくちもねうへにありをかりる養へすくち
水へしれをへうりする養をかり彼樂天の詩よ
但有泉声 澆我心更無俗物 當人眼是亦の情
ふふらふて後令樂天西行よ及てぬまでも先
ふすくちとわといふ白きさかり

然れや本林のあたりに新日也

文部丹後れちのく旅より

ゆるとさくくち

まふね戸也野も家の待まうけ

画契

西行れ茶難しかま松乃家

夕秋四十二

一書よ露沾とを茶の只無さくむく彼中座
の持程を愛してよけ山ふよの思か返さる
る

またね細き加賀の園うくち

昔良も膝をひくく伊智れ

否も崎といふまよふゆりあれ

を先きてねとまにけりて

例れふすとも茶の系と去る

さかりねもの思くく強るもれ

恨變を記れわつれてまよふ遠子

うそー平もさる

今よりや書身消さむさなれ家

一書は桑畑乃加賀よりの吟く唯今まで同好
 二人ありを著良と先立うう好よつけてと笠
 此文字は消して唯一人と不くとたきくむら
 ぶなくあそびれおむひやうそをうりあり
 一書は長崎と桑名のむらゐよて本若川の巻く
 蟹を厄のりりとも前漢書後武別李陵詩は蟹
 鳥俱北飛一を厄独南翔子當田此館我當帰故
 郷とりふ念あり著良句よも古云のあり七
 於大境よくをりりれを助す
 如新う岸上の答意を制て
 志く意のさひし味を忘くくな
 芭蕉少のの俳諧と集素才一よ一て一汁一菜

白秋四十三

菓子と並豆よて反古れうよ書ても餅こ
 とさく汁のかよ花美よ山海の味をそは
 と俳諧乃の本意よもあつれとあり
 林武よ云英食珍味よふける人の化るよふ
 きやれしとさく
 二見は浦よさ
 視くとひろふやふほき石の音
 一書は西上人二見は浦よてふ不き石をむら
 ひて視くと病をひききて文巻とあ虫
 りふの付あり
 於君う崎よて
 松方れ也書急いさう急いと刻をた

古洞の吟すなりおそみら崎とら相沢久良翁
よて能見堂の入江もあり千尋の形森
てそれ名も

笑哉る日と雨ふりて山を
雨よかくはる

浪化の曰宗その親を
見よまくにき方の時中のかたる山の端此方
よせて此方の宗書よ笑哉る日と雨降して
くまの甲にかられたちとこれをおねの俣
夏よ儘きすは是柄山と風景いろし
あれも富士のやのさる日と雨もけぬよ

白秋 四十九

富士の又よ毎日わかれ風景面とすなり
雨とハヒス

一本よ旁りりれと
一書よ云志りれと
う白集よ
小よ
見てもおよ
とふと
愚考
旁かこめ秋
余北山
りれと

るやもある考へ

崑崙ハ遠く阿ノ道茶
方丈を非仙の地之暇に
ありしり土著ハ地を接て
茶ををさく日月のるに
云門ををくくを印ふ不
くも表すて其系千
多の詩人山白く織る
才士文人も之樂を終り
画二も等々行々する
恙破姑射の山に非人
てその白を非にせらるる法を

白秋四十八

よくせむ

愚考 崑崙 滑崙 鉄澤論 髯崙 滑掄
骨崙 渾掄 滑緯 崑崙の名天竺隣る
崑崙山ハ度一万里一万余千里王母穴居す
のよと山海經よりあり 崑崙方丈羸州ハ
列子曰渤海の中ありて非仙の宮あり 崑
崙人の到るる所なり 崑崙ハ不二千名ありて
七部ス後よふと 崑崙ハ表すて
崑崙ハ八葉よりあり 崑崙ハ表すて
うも表すて 釈迦嶽 弥陀嶽 大日嶽 不
動嶽 薬師嶽 観音嶽 浅間嶽 地藏嶽

病尸此等田にかちて旅草が
去来抄曰猿蓑樵の時此句一句入集はへしと之
凡北曰病尸もさるる妻たれと小海をにかりし
いとくは白のかげととありていへく誠と秀逸とを
りふ去来曰小海をの白いめつしといへとてものを
業しきり時を争ひにらもおむ病尸も格言く
就幽ししていへつる愛を業し付心と論し終
ふまむともて入集はへし後先抄曰病尸を
小海をさるる同しとくは論しりるやといへ
まなり

目にかくる雨や志をり此のりる
乃のりるを詠まを見れを次廣の秋

一書と見ばせをといぬ石より浪路の風系よ及
あつたあふつたれをとい旧事をおもひ詠ふ心
りやるれをといは次廣の詠をいふあるへし白
浪系那月のもよもれぬぬまにりて同よ此を
まけしとや

雨は夕や世間の秋を 罍 罍

愚考東都芝居の由来根元記云元祖中村氏
猿蓑と三所出和申と寛永元年御言免ありて
申橋に於て太鼓櫓をあらし小座立よてお初め
同九年人形町にうつり同十一年市村お友らも
御言免ありて両座とある正保元年本換丁
産所言免あり申村産今此罍所は茶と安

四車よりつゝされ申村の三石の産をもて
芝居の根えとけぬと標界とハ押出して候
るあゝへー

秋十と世却て江戸をすれ右ハ
一書ヨ客舎并列己十常帰心日夜憶感陽を
端更渡来朝水年午ニ英州是故郷とく此詩
此意ハ似たり
愚考の貞享元甲子吟の中此一台く此と
此句等始とありハ世と記録とも云はれ
意を記して江戸とすハ此早と世を記したれ
伊加文のすハ一むうとありハ却て江戸を右
にれとくよおとひ他玉ハ心比せるとあり

白秋記十八

詩れうちハ十と世と似れ白れうち又秋十とせ
と似るよとと事世の心をよと記すはし
事と世とてハ一糸の義にさるるよ十と世と
似れされとて十と世とハ似るへうり秋十
秋とてさる一年とてハ似るよ秋十
とせとて十と世とハ似るへうり秋十
と一熟の義とありハ一稔の義とありと
まゝ

かアかけ田面と勢也里の秋
一書ハ刈郎の田面とせハ世とてハ一
けてかりもさるさぬ不に里れ秋とり不
まゝとありハ刈郎の田面とてハ一

此魂をきかちせしるよくし味ふへし

知里の寺令なる新宅地歟

よくすのちのちをよるふ春戸の秋

一書に淮南子説林曰但休是而蝶虱相吊

大厦成而燕雀相賀

愚心考知里と吟海歌の千代倉氏にて翁

の門人なり知里より三代目傳芳方の時掲

見ゆるに慈翁のまは此文庫並に寺

奉納の仙の懐紙是等の千代を此標の

不藏く知里の時追翁おし止るありき

をむすし〜その家来此小書にまをた

書てとせたる旧名ハ利ゆりてありて

百秋に十九

千小書に忘せといふ名を授け有るは
觀とさるれ一紙傳芳既三目あ七を
字よせ予は合せたりき大工を修せし
て千代倉地帳下にあたり今ハ三十餘年
たれをいふさかりん

為列

笑つて此の木とつ果々本意の秋

愚考尾張より出て秋の月見むと云ひ

きり〜おかし地吹さり

旅り

ゆつてさく秋を野さる一の境

愚考秋は昔光さるり江戸へ運りて

うれ小貝ひろくむと種め
 候に、みををくは上せり
 あり天を伝ふとつふれ
 候に、竹筒とつふれ
 候に、免を僕あきとみ
 に、ちりのせり遊んづ候のる
 候に、吹つけぬ候はつる
 候に、ほとの小家とつふれ
 候に、華をありあつて茶を飲
 候に、酒をありあつて夕暮の候
 候に、一に候はつる
 候に、一に候はつる

台秋

又細き管を流すの候に、丸圍の位梨
 りふすすくは小貝はまは候、小貝とつふ
 候に、我くもつてつせ見よて、朱貝は貝
 山、貝をとりつふれ、赤き貝をとり西の
 候に、改そむるまはつて、小貝むろふとつふ
 候に、わりのみあふ候に、むとよ免るはけ
 候に、名よて色の候に、むとつふれ、改
 の入海、の末に、つふれ、改
 天、屋、伝、ふ、ま、つ、屋、の、家、を、ち、を、名、の、る、丸、圍、の、
 候に、改、は、つ、ふ、れ、一、に、候、は、つ、ふ、れ、改、は、つ、ふ、れ、
 り、あ、も、れ、改、は、つ、ふ、れ、一、に、候、は、つ、ふ、れ、改、は、つ、ふ、れ、
 と、つ、ふ、れ、改、は、つ、ふ、れ、一、に、候、は、つ、ふ、れ、改、は、つ、ふ、れ、

須原の律令の名不^レ_レ西須原中須原
東須原 溪須原 陸須原と云ふ所^レも
忠度のう^レひ物^レも 其^レの^レ須原の浦
と云ふ^レ所^レも 其^レの^レ須原の浦
好^レく^レと云^レふ^レ所^レも 其^レの^レ須原の浦
好^レく^レと云^レふ^レ所^レも 其^レの^レ須原の浦

大^レに^レし^レる^レ秋の^レ朝^レ野^レ也^レ云^レ云^レ

胡紫云 老社^レの^レ神^レ也^レ云^レ云^レ 朝^レ野^レ也^レ云^レ云^レ

思^レ考^レ古^レ人^レ著^レ書^レに^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ
秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ
秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ

光^レ之^レ是^レ時^レ陰^レを^レさ^レけ^レ陽^レを^レさ^レす^レの^レ義^レ
さ^レに^レ秋^レハ^レ早^レく^レ起^レへ^レき^レを^レや^レす^レの^レよ^レく^レ候^レ
さ^レす^レを^レう^レの^レひ^レ目^レを^レさ^レす^レの^レ説^レを^レ振^レり^レ
ゆ^レり^レと^レ候^レを^レさ^レす^レ候^レ

胡紫云 老社^レの^レ神^レ也^レ云^レ云^レ

思^レ考^レ古^レ人^レ著^レ書^レに^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ
秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ
秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ

思^レ考^レ古^レ人^レ著^レ書^レに^レ云^レ云^レ 秋^レ野^レ也^レ云^レ云^レ

就其の漸飛打事なり
書討死の後亦義件
其状又傳之乎社に
其れより極に高仰せし
る事ありまのあり
に及く事あり

一書と云ふや如甲比下の事あり

一書と云ふは十月懸輝入我林下とある
を記向して其意のこゝに記し
心やたゞ其後別當として
りし詞をさしけり
忍た其意の端は極に
一頁見て

〔秋五十一〕

なまじき事をしとありて
や不見は其後別當として
いり出たるも其後別當
其意としてしとあり

其意の家小海をにほ

其意の事とありし事か

其意の事とありし事か

其意の事とありし事か
其意の事とありし事か
其意の事とありし事か

一本の事とありし事か
其の事とありし事か

不潔させしむる人何れに梅の虫
両亭ふならしつゝまよておろすすたけり
そよ水を鳴もせぬくせに梅をうつらや
きいふとせぬきつゝたけり

大和の玉と新脚して暮
下郡林の内といふまよを
此ふに例の千早く回里たれは
日頃とくするまよを休む

義とつり契とぬあり

梅の弓書読書よたよくさむ行の契

愚考望しつゝ紀行のうちのるくまき
序よ大和色りいとして後ろを隠色よなく

さふし竹田ふたれありかたしと隠れよとせ
るよ此の面白をとりわけ世人もていふ
とろかりちる宣たつゝまよけり行のおく
給うらつちをよけ色よまきつゝて
おのほろろたなくさむを與あり
女たつゝへーかをらうらつて男の商賣
まらされと林の契ハ女よ治ませり
として竹の契ハあしあむをよまき
出ろしをよめとあむをよまき
死活ハあむぬゝ西は色新れま
の白と急下に合せて見

秋はあむと秋をのちらつ

隠れと春をたると鳴 蝶の風
秋の北巻戸の風物 雲よりあす

物巻ひの依き 糸一匹 杖

お早ひとつ連る

静に雨の肌をさすらむ 秋の風

此四句はるる古湘といふ世 伝る業方これと
とても魚のおもひ 静の宿るをわすれ 身の色
いよたちて 恐らくやこゆ

題画屏

君も長とさきまき 秋の風

愚考 句伴古風よてかと 画屏

らかあす寸作 九め 虎の模 括りて

むうし 牛 冬の 霜と しの みの あり 牛の
申よ 志との 糸 岩る 竹 一 心 助 あり 中
よ 三 寸 を かり なる 人 おも しく なる 色
名 を かく や 娘 と しく 是 を 夢 しく 色
好 みの 人 しく 人 よる ひる 夢 しく 人
りり 人 人 の 人 しく 小 世 よ なる きの あり
の そ しく け 糸 しく なる む 方 よ 志 しく か
い む と しく い つ れ も 世 よ なる きの あり
た せ れ を しく なる しく 仕 あり しく 入
り ても なる しく なる しく 歴 しく あり なる
を あ しく しく して 皆 あり しく なる しく なる
お しく なる かの 娘 の かし しく なる 世 よ なる しく

とれるを帝きこりめりて内
侍中臣のふさ子は勅して尼せよ
あひしれともふつくあをさうり
さうりを家仕よおぬるせうと
おろせ半ありつれともうけ
ひうさうりけきえ行幸して
おらむするよさうひあく
めてさしれをめでおをり
やまさむとすれとさうひ
さうてまうりてやみぬ
そのうち月の都よりむうひ
よありて天上して夫よ
うりくをくくものうさう
よゆつるのみ君もはも
の細うけは露よかやよへ
もさうて秋風

と吹幸よ用ふさかく
美船尻糸袴の世角
押まをさうりめける
不平懸歎等のおか
はてあつたよかぬ
用をりとかうく
一と契屋ハまの
見よ及するのふ

富士川此をさうり
三ツ斗をさうり
押まの位あり
此川のまはる
かけり
浮世此信を志のく
くを
坊に
まを
此の
命信与と
押
まを
小萩もとの
秋の
風と
まを
あす
あま
まを
と
袂
より
く
ひも
の
投
て
通
く
ま
い
り
ま
う
や
は
父
り

悪かれきり母ふつとやうれた
るは汝をうらむるもあはれ

只是天つて汝の性をつつ

なきを泣け

猿をけり人捨てに妹の風いりふ

素堂云ふ上川に捨子ハ惻隱の心をえりり
かこふとき、涙を枕としてすすり泣きむさふ
泣れよとちかおもて出さず「身をかふ
れれそなるとき子とり子もやむ心かいたく
悲しうれともむり此人の捨さるるまへおもひ
よせてあはれなすし泣也
愚上りそれハ今素堂集の捨子れおたり定家

白秋五十八

何れ子息為取の交に「捨てり親とふまに
かひいせり世に事ちかて孫あるたこの
たよとの念もかたむいてあはれなり此句よ
つきて種くのは教ありきと信置あれた是を
賜以て五文字猿をうら人 猿置て猿を
て 白子らふ用たりの捨子れ

宋書曰猿祐之初置蓋初室千餘安收道
路送索之嬰兒云々時の君よしりてかく
あはれかききりあはれなり
白れ意とと五字中七文字よて猿をけり人
猿をけりて實ふつて三まらぬ涙と杜子
秋皇の詩も似るしとくかすしは上は

そと燃しさと抑ふる秋風の吹あてたるか
たしさといつれかたしさとあると同つ先
たるく猿と人面と一とちよいくたるとく家と
側隠れを懐くへ是れも是れ小の業平此同義
歌を懐くして休む出せるもの之官署歌の
後と十六款活葉此句のつよくとをく出す
屋りくを見合すへー

松菫すゆ此はけーさよ秋のそ

愚考あつても此よ云松をよをひ久しく千と
世をも経ぬへく竹も前文ありて天子此みき
ホのちゆつるを志すも海山又何ぞして世の
そよもいさゆきくめくるそや登りあて交

松竹たれを秋のそひりさそを志れそむとのそ

是は流うかにいふ一常盤の
横ありし伴誓れそむといひる
そ新及又似せり秋れととい
つれのそこあらぬいさりそむ

そや

義新此はさくろふ似せり秋のそ

一書又只神弓の内海の秋風よ涙をそそき
半くおると見えへ一陽陽永叙秋を鐵曰
夫秋刑官也於時為陰又云象也於秋為谷
是謂天地之義象也象以肅殺為心云々
愚考貝系改録臨記ニ冥々象と今測の岩

此乃中山中此里あり源氏経の母常磐
墓あり其乃の小表ありと云々

不取して

秋風也義も留も不取此実

故祭云新古今集より一人すかぬ不取此
実屋此取ひさしありのちハ唯秋の凡
の之を撰写してかくらば此是るなる事
愚考取不取の實も如漢年製したる外此
しは漢漢の玉不取取して天武帝白鳳三年
又実を居ると云々又風去記曰天王と大友
皇子と合觀此時天王方云報よありり九ハ
千の中を不取の實と号くとあり又本紀年

白秋年

代記より白鳳元年天王と王子と不取此実よ
除を背けしあり又云元明帝和銅六年行
儀を割て英徳と号けり云々

那谷寺にも宮衣さるる古松

植たしとて當ふ事此觀言

當岩此上と造りかけて陣

傍此土地なり

石山乃不とり白ありあり此風

細乃よ山法白皇三十三品の呪詛とせさせ
多して後大照此像を安墨し玉ひて形智
谷經の二字を分ちてかくす号し此云
か賀此山の中にあり

愚考形智ハ才一輩トシテ紀及ナリ谷汲ト
三十三歳少納トテ英徳之花山法王ハ本朝年
代記ハ人皇六十六代の帝法を依ツテ山寺
トテ之ヲ祝賀法講入覺トナシテ在任ワシ
トニ二年ト云ク

令以此一笑といふも此去事也
オモシキ事トテ之を見返るを

懐
懐

塚ト云ク我位者トシテ秋比登

一書ト云皆川忍文操拾遺ト陳書槐亭記曰
秋天滿西湖一流芳澤東岱如雲物古人墓此心
トありし心ト云ク

台秋六十一

愚考清浦朝比代ト云ク紙ト曰紅甲納之匡房
御流系安楽ト云古神の御座ト云曲水喜比序
文ト上略竟母廟荒春竹染一掬之淚徐君墓古
秋松懸三三之霜彼蕭々暮雨花及巫女之嫺々
秋風人下伍子之廟一四寸其序文披講此時石柵
をふと出する所處此文句よきて類に唱和す
ト云ク是此秋比を云ての句依ぬるの方ナリ
此より亦くむたいうは芭蕉此位たれとて
何そ懐々初々むやア、齊々もか

拙文此名をつけて

翻の本乃そ念あつたな秋の風

愚考此此槐の矢くすま葉葉との後ナリ云

半くもれそと程公のむくく矢く新枕を
と衣の〜れ〜方なり

伴物此申村といふ事あり

秋 此 伊勢の墓系於凄

坐右銘

人此經をいふなり終已らるを

説とたのれ

心此い〜た層さむ〜あり此を

一書云後漢書曰崔瑗字子玉位坐右銘曰每
道人之短無説己之長下略辰月さふ〜といふも
左傳曰晋侯再假道西虞以伐魏宮之奇諫曰
魏者虞之表也魏亡虞必從之諺謂輔車相

仍辰月亡齒寒其虞魏之謂乎〜此あるを

と〜人公せて白と〜り

且先木も〜らく左傳此文も不用之再考せ

右のつ子玉り坐右の銘と唐出〜て〜は系

を志〜を〜る〜白樂天云崔子玉坐

坐右銘余竊慕之雖不能及常書屋坐

下略又李至云崔子玉為坐右銘白樂天亦為

座右銘按身之道等平彈一矣予嘗銘心下略

された〜銘も〜き〜是を志〜る〜事〜り

秋此銘や字み中切此音

一本よ〜らあり〜字の中とあるは非し

此句を多れ云知しきるく天皇曰是ハ白居易の
元来空しく依り今違の字を以て是よりかきし
杯は下と白居易と吳城同情とと感興有るハ
一字も大切なりす中

山々詩

金昔千を傳ししてありてたゆま
こころは士の志なりし又賢編な
らざるをいふも志こほいさ
とくはれ會ひ風をさす義を骨
ふして其を賜しき症を
禊にかけて風を肺肝の
よ抱くし心予とちかふる

十と無ふる九とをよや此と
たうと官を辭して若洞又先
賢は此を慕ふとくもを女
をふたひ程よをさしして
いまし世故またふさされとも
菜原の月たみくれば日し
ゆをさきしてて兼伴の秋
中治の由井合は此波の枕
よ月をさふとて強念ふばを
實そはかゝるさよとさくらを
中~~~~~してゆく鳥たえぬま
~~~~~しきせいの衣めま〜印七



そこの母よさきなら七聖の  
和子よおとしをぬくはいつこ  
をいふとき歎のみすしよたま  
はつれ公もあるも腹あぢや  
も悔すしきうつをものいさ  
さのき、和れうつを志われ事  
つ子の被いうよふあけくもに  
くもあつていふ今、此とき  
の心さく志しおとかなしき  
の恨さうかしのちうけき  
かきらうまや侍くそ、  
族のあられくひくつる

睦自たううよ和子よのよを  
予らそよ蓄ふりあつた  
ゆさけ一きしをと王戒  
の眼さしうるをいと戒  
を掲ぐるは戒と名づく  
よろこぶるよ今目のあ  
きつれいける所むつ中  
したなくしてそ人とも  
かきらうまや侍くそ、  
こく手のぬくはこれこ  
慈の被よむすありあ















茅舎の感

昔々天和の一年号ありて和史始と云後漢書  
小桓帝ノ詔曰天人協和ノ萬邦咸寧多ノ管原  
在庸考之さて句此之ち五雜俎曰凄風苦  
雨之夜擁寒燈誦書時罔紙窓外芭蕉淋漓  
トノ声の付く  
一書云後ノ芭蕉此字をそらして其のよか  
さしつゝも恨況たり利かへし  
一書云芭蕉やふと盥ふ雨とをすそ行くやと  
言ふ意あふいととあはぬへ  
むすしとと百韻巻末の字

秋七十

麩 十

千 十

ト 十

曉 十

其 十

桃 十

素 十

似 五

所 十

言 五

華 一

凡 六

峽 五

右ハ白表の六人目と云り是時いふやしし三十九  
葉に。卷即麩樹。小不ひの意。揚句を角  
新ハ辺の能清して白ひの花をゆつと。卷の意  
書よ芭蕉と云り。と出はるも。そらして和法人のよ  
まをよひてそらさる。理のあはれを



おもふに  
傳ふ云、卷末に盛の式十三人ありて上七人下  
に六人あり十三人ありて上七人下六人ありて  
中十人あり知るにいつれ上を考ふに傳ふ書  
法あり

猶ももにふありて路のきかぬ  
以て考ふるに

愚考、史記曰、項羽圍漢王三匝、於是風起西北、折  
木發屋、揚砂石、楚軍大乱、漢王乃得脱、騎逃去、  
又文選、風賦曰、鑿石伐木、折殺林莽、  
徐氏曰、風の起るに、  
法曰、神のきく、  
法曰、神のきく、

台秋七十一

ちのしを思ひて、  
ハコホ本まき、  
やのき、  
族何れ、  
そ、  
了、

徳、  
見、  
知、

是、  
為、







ひすくあむくむかりもたせ性好て接ふ  
接ふ前小樟と云

いふよ木もも花やよかづる乙をが  
右側と

いらに崎程通りれを及ぶ程で

伊良右青ハみの初十妻しくおりる

木つぎに根をたたく位 石 木  
木塚の入りとてりり 根 石 木

初と延室冷と天和のみと

田中 法藏さま

川 ぶくや子松かすこの 崎のあ

五考信 龍寺と三匹田中村とありて浄土宗にて  
寺八十三石と云

相代本にうらうらなる 堀の内

古今抄云新乃一章も田莊の浦家といふ歌  
ありて法をいふと云ふ歌の富米をおもひ  
りていふさむさむと云ふ又文字よふを切て  
相の本やといふ及りれとさうも相の本は  
後白なりむ是ハ相とせりし新もあ  
りて田莊を称する歌ありと云ふと云ふ  
と句を切て堀のうちを隔へきと云ふ  
況や新をくなくと云ふ法と古を裁入  
なくを命ふと云ふの字は佛きを許さば







者必妻代お杖なり

翁五十年の秋乃句に初志の覚悟といふ類々

お妻よ下

稲妻を手にとく秋風の紙燈籠

何の事なく稲妻を手にしたよつと秋

香雪云新古今一いつくしき人ゆへにそをなごむ

礼を焼くしよみそ中をくまへり秋とまき

式智識は曰かなん禱大瓶の

七とおといと有難くそり

稲妻をよととぬ人のそるはと

支考つる糸抄と身勝手は論をかゝるを月ひ

かこ

一書よ本探の云吾情あり今やりと思心茶

一粒を百ふとそりそふ有よもいかにそ

おあつて三十粒の粒くまよ大悟りの人の情あり

泣かりと思心念座をそりてそまきとそ

静寂云一休和者のかた「情ありぬもさしるもあまし

まよひ方り情ありぬ先をよととそりふのまき

粟はよて

いたつる戸の面をひらめか

本間さるう宅よ散骨ととも

報をかまへる能するそまを画て

おまき屋の壁よかけたりまこと

け茶代たすれなとそり



夫をく心や彼器器を枕とし  
 て御小答うつを分りさよし  
 賢此生業を志めぬてくもの事り  
 福書の中流のところにろろ 福地 福  
 続猿への解く妻いか月の新うとろを溜りて  
 よ心へくはてく心人やて用中へかろけ  
 福つる地割れくくゆく云位の存  
 一書云云位學の抱よひくくものあもものか  
 鬼もすれを妖怪のものとは命すつ言れ方  
 尖くを足踏めさるもれこ  
 近付に成るるわのるく 葉山子か  
 うきまゆ地志く山田れ落しあ

乙の秋七十六

くかつる和三度起るも落しあ  
 か加の園よ入  
 福の考や入る市も有後地  
 有後地も試中くく後者も有後地たも  
 か加の地さり  
 人よ業をもらふて  
 世れ中も福新志ろりま 福地  
 徳の子や福かまうけて月を又る  
 思考者根母也「いとくろを 後田刈る福う  
 うきまゆ地かろおろ月もろく心の手て  
 後写 後地 法之福刈を福すると徳をば  
 後事くく











此を名は徳の玉に屬せしむるを又年契曰  
 聖武天皇天平三年福訪國を廢して信濃  
 國と保すと云く弱遠く信甲の玉をよ  
 すくはしむる年派をを又云く  
 之れ月也其年派を又云く  
 一書に三日月の出るは花の夕アと云て其年  
 たるをわく桂をわく答をわくは舞といふは能  
 の月つきの  
 一節は臍也其年の名入答をわくと云や夕ア名入  
 此書寫の何ややと云く  
 常徳に云うは  
 是て答をわくは

明りや廿七松も三の月  
 思考考度と書てひさちとよむ法をわくは  
 一曰日本書下向の時流は板の林下新井をと云  
 事し一新一井をわくは自は袖をほめてひら  
 ぬ衣に新漬玉と号はくは廿七松も下強な  
 是にさしむる一洞茶葉の新徳は多の玉おを  
 りの時月あつたゆかりの顔に恥よるは  
 月前言志よてよまをふく三日月の中を  
 一なるをわくはやうき世をわくはた免し  
 是則下強くは新製はくは徳よの  
 恥中のことよて一入をわくはくは  
 大層振渡就院より



何れも此見之にも似たり三日月  
 七部大かきよふなり  
 三々月の地を既方よりその  
 又さうけやすの丘影の夕月  
 一本よすの丘と云一又一本に  
 物成も非之丘形にて夕月  
 初もさやをうつく雨は月形  
 山嵐茶葉の墓に流る  
 又一和その七りを墓の之り  
 愚考せりの記をとるくり  
 則三々初七りを下れ  
 そのとりふさるるなり

白林八十



